

Title	教師の成長・発達に関する実証的研究：教職志望学生の成長観の変容過程に着目して
Author(s)	姫野, 完治
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59336
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	姫野完治
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第25308号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	教師の成長・発達に関する実証的研究 —教職志望学生の成長観の変容過程に着目して—
論文審査委員	(主査) 教授 小野田正利 (副査) 教授 木村 涼子 准教授 園山 大祐

論文内容の要旨

教師の仕事は非常に多岐にわたる。学力向上に向けた教科指導の充実はもとより、部活指導、掃除や給食の指導、保護者対応等の多様な役割が、大学卒業後すぐに求められる。そのため昨今の教員養成では、かつての師範学校の再現を避けながらも、学問的・専門的な知識だけではなく、実際に学習者に関わり、授業を実施し、教育病理に対処する等、教育現場で生かすことのできる実践的指導力の形成を重視している。大学3年次までに理論的内容を学び、それを4年次に教育実習で適用させる完成実習型カリキュラムではなく、理論と実践に並行して触れる機会を4年間にわたって段階的に位置づけ、両者の往還運動の中で教師としての資質・力量を高めるカリキュラムを設けている。しかし、このようなカリキュラムが、教職志望学生の学びをいかに促進したのかといった「学習者の側面」を扱った研究は、これまで注目されてこなかった。背景には、履修主義と習得主義の問題がある。わが国では、義務教育においても厳密な意味での落第制度は取り入れられていない。出席日数さえ足りれば、たとえ学習指導要領に含まれる内容を理解していなくても、進級および卒業できる。高等学校における世界史の未履修問題が話題になったが、そこでの問題は授業を履修していないことであり、習得しているかどうかでない。教員養成においても、同じ教員免許状を保有していれば、教育実習の期間や配属学年、授業時数に違いがあろうとも、その違いは問われない。そのため、これまでの教師研究においては、教員養成カリキュラムの提供＝教師としての成長・発達と捉えてきた。しかし、教師の成長過程は、たった一つの「順調な成長」のプロセスが存在し、誰もが同じプロセスをたどるわけではない。一般化された教師のあるべき姿に準拠し、そこから欠陥仮説に基づいて養成研修する／されるということに留まらず、教師自身が様々な経験を通していかに成長・発達していくのかを解明することが課題とされなければならない。

本論文では、長期にわたる教師の成長・発達過程のうち教員養成段階に焦点をあて、教職志望学生が教師を志し、様々な教育実践経験を積む中で成長・発達していくプロセスを実証的に解明することを目的とする。その際、「成長観」という視点を持ち込む。「成長観」とは、過去から現在への自己の成長を実感する「成長感」と、今後の成長の目標や、目標に向けて自己のキャリアを高めるような「自己教育計画」を含む概念である。

【第1章 教師研究の類型と変遷】

教師研究を8つの領域に分け、各々の変遷をまとめるとともに、パラダイム転換のプロセスを明らかにした。中心課題である「教師の専門性」に関する議論よりも、研究としてまとめやすい部分を切り取り、各論での研究が積み重ねられてきたこと、1980年代を境にして、教師のあるべき姿を明らかにする研究から、教師の現状に基づく研究へと主眼が移り変わっていること等を整理した。また、Schon, D. (1983)が「技術的熟達者」という専門家像へのアンチテーゼとして、「反省的実践家」という専門家像を提起したことが、1980年代以降の教師研究の柱になっている一方で、「技術的熟達者」像に基づく管理的な教育制度が強化されている現実の問題を投げかけた。二律背反の専門家像から脱却し、両者をつなく新しい専門家像や教師の成長・発達を描くことの重要性を指摘した。

【第2章 学校ボランティアにおける成長・発達】

昨今の教員養成が力を入れている学校ボランティアを取り上げ、教職志望学生が活動している内容や、そこでの成長・発達過程を探索した。ボランティアの企画・運営に学生が携わることにより、実践的力量的の向上はもとより、組織を運営し連携するすべを身につけることができるという利点もあり、期待が寄せられている。とはいえ、やみくもに実践経験の機会を増やしたからといって、力量が高まるわけではない。ボランティアへの参加学生に対して行った質問紙調査の結果を授業補助の有無により二群に分けて比較分析し、それぞれ異なる効果があることを解明した。具体的には、授業補助がある場合は、授業の進め方やつまづきへの対処法の幅を広げることに寄与している一方で、授業補助のない場合は、目前の子どもに自分ができることを自問自答する中で、教職への責任感や自分なりの指導スタイルの確立に寄与していることを明らかにした。

【第3章 段階的教育実習における成長・発達】

教員養成課程に入学した学生97名を対象として、大学入学から卒業までに行った計6回の質問紙調査をもとに、教職志向性や成長観が変容していくプロセスを探索した。学生の教職志向性は、入学後から少しずつ低下するものの、2年次の主免Ⅰ期実習を契機に高まること、しかし3年次の主免Ⅱ期実習後に教職を目指す学生と目指さない学生に二極化することを明らかにした。教職を目指す学生の中には、教職以外の職業に興味を抱き、積極的な理由から進路を変更した学生もいる反面、教育実習等の経験をふまえて、「教職に就きたい気持ちはあるが、教職でうまくやっていく自信がない」といった理由により教職を諦める学生も多いことがわかった。また、教師に求める知識・能力・人間性に対する回答の遷移過程を分析・モデル化し、「理論先行型」、「実習再考型」、「比較実感型」、「段階的軽視型」、「瞬間重視型」の5つのパターンを析出した。これらの結果を、教員採用試験を受験した「教職受験群」と、途中で進路変更した「進路変更群」の二群間で比較したところ、「進路変更群」の学生の方が幅広い「知識」を重視する一方で、「教職受験群」の学生は教師としての「使命感」や子どもや保護者との「関係性」を重視しているといった違いがあることが明らかになった。

【第4章 教職志望学生のライフストーリー】

教職志望学生10名に対し、1年に1回、計4回のインタビュー調査を行うことを通して、幼少期から教職を志望し始め、大学へ入学し、卒業にいたる教職志向性の変容や成長・発達過程を、ライフストーリーという形でまとめた。教師を目指す学生たちの大学生生活は、授業を履修したり、教育実習を経験する教員養成カリキュラム内だけではなく、部活動やサークル活動、アルバイト、そして恋愛といった私生活も含めて、教師として、人として成長・発達している。教育実習での失敗から子どもと関わることにトラウマを感じながらも、少しずつ回復していく学生。教師を目指すことに自信が持てない中、子育てと教職を両立する教師と出会い、将来への不安を克服し教師になった学生。ボランティアなどをたくさん行いながらも、自らが教職に就く自信を持たずに大学院へ進学した学生。教育実習を主軸としなが

ら、自分の生き方を問い直し、進路の選択をしていく10名それぞれの成長・発達過程を明らかにした。

以上の研究をふまえて、教員養成におけるナラティブの可能性を検討した。教師の成長・発達は教員養成に留まるものではなく、教職の経験を含めた多様な人生経験を積み重ねることにより、よりよい教師へと成長・発達していく終わりのなき旅路である。右肩上がりに、テンポよく階段を上るようなモデルがあるわけではない。様々な厳しいまなざしが向けられている昨今の教師には、むしろ困難な状況に直面した際に、そこから回復するレジリエンスが求められる。知識や技術の習得に特化しがちな教員養成段階に、その後の長期的な成長・発達を見越して、教職志望学生自身が自らの実践やアイデンティティを語り、あるいは現職教師の語りに触れるといった機会を設けることの可能性について探索した。

論文審査の結果の要旨

姫野完治氏が提出した「教師の成長・発達に関する実証的研究—教職志望学生の成長観の変容過程に着目して—」は、教師を志す学生が教育実習を始めとする様々な教育実践経験を積み重ねる中で成長・発達していくプロセスを探索する上で、成長観という視点に着目し、学生に対する4年間の継続的な量的及び質的調査をもとに実証的に解明した論文である。

論文の前半（第1章）では、教育に直接関わる研究領域のみならず、医学や看護学、経営学といった領域でも知見が蓄積されている膨大な教師研究をつぶさにレビューし、8つの領域に分けて変遷を概観している。教師＝専門職であることは認めながらも、その内実を議論することなく、教師の社会的地位や待遇の向上、専門職としての教師に求められる一部分として知識や技術を解明することに力が注がれた1980年頃までの教師研究が、反省的実践家（reflective practitioner）という新たな専門家像をショーンが提起したのを契機に、大きく転換したプロセスを解明している。その上で、反省的実践家モデルに依拠した研究と、技術的熟達者モデルに依拠した研究が、異なる二つの研究の潮流として推進されている現状を問題視し、技術的熟達者か反省的実践家かといった二律背反の専門家像から脱却し、両者をつなぐ新しい専門家像、教師の成長・発達を描く研究方法の必要性を指摘している。

論文の後半（第2章から第4章）では、教職志望学生を対象とした量的及び質的調査に基づき、成長・発達過程を実証的に明らかにしている。大学入学から卒業までに行った計6回の質問紙調査を通して、教職志向性や理想とする教師像等が移り変わるプロセスを探索するとともに、大学卒業時に教職に就く学生と、途中で進路変更した学生のデータを比較し、その差異を解明している。また、教職志望学生8名に対するインタビュー調査を通して、幼少期から教職を志望し始め、大学へ入学し、卒業にいたる教職志向性の変容や成長・発達過程を、ライフヒストリーという形でまとめ、量的調査では見えない詳細な学生の成長・発達過程を明らかにしている。

本論文における姫野氏のオリジナリティは、二つある。一つは、膨大な教師研究のレビューによって俯瞰図を作成した点である。様々な学術領域で独自に進められてきた教師研究を領域横断的にまとめた成果は、今後の教師研究の基礎的資料として価値あるものと言える。二つは、4年間に及ぶ量的及び質的データに基づいて、教職志望学生の成長・発達過程を実証的に解明した点である。教師の成長や発達に関するこれまでの研究では、教育実習や校内研修の前後の変容を探索することが多勢で、4年間という長期間にわたり継続的に量的及び質的調査を行ったものは皆無であった。とりわけ、追跡形式で4年間にわたりインタビューを行い、それをもとにライフヒストリーをまとめ、今後も継続的に追跡しようとしている点は高く評価できる。

以上のように、本論文は、博士（人間科学）の学位授与に値するものと判定された。